
君がくれた命

龍牙 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君がくれた命

【Nコード】

N3479F

【作者名】

龍牙 零

【あらすじ】

親友。それは大切なもの。それは大きな存在。それは時に残酷なもの。

現在、過去、今（前書き）

一応設定は中学生です。ちなみに名前の読み方 龍神 陣↓りゅう
かみ じん。 紅刃↓くれは。 苗字はまだ考えてません（汗。 滝
上 竜一↓たきがみ りゅういち。 ってな感じです。

現在、過去、今

「なんかさあゝ、あいつって全然喋んねえゝよな」

「だよなあゝ。何か暗いつてかさあゝ」

学校の教室の片隅で頬杖をつき空を眺めながら、そんな会話が耳に入る。

しかし、気にせず聞き流す。

転校してきてから二週間。誰とも会話する事なく、する気も無い。他人と関わる事をやめた俺には、勿論友達と呼べる奴は居ない。

「今日は雲が綺麗だね」

そんな俺に唯一話し掛ける人物がいる。

「龍神は空が好きなんか？」

いつからか毎日の様に話し掛けてくる。

返事を返す気なんか無いのを分かってるくせに。

何も言わないまま、俺は教室を出る。

立入禁止の立て札を無視して、屋上へ上がる。

此処のドアの鍵はいつも開いている。誰も見ないのだろうか？

「ま、その方が都合良いけど…」

屋上へ出ると、心地良い風が頬を撫でる。

最近少し肌寒くなってきたが、それはそれで気持ちいい。

空を見上げる。

教室で見る空と何等変わり無い。

「此处、立入禁止だぞ？」

突然聞こえた声に驚き、声の聞こえた方へ振り返る。

そこに居たのは、さっき話掛けてきていた奴だった。

「何だ…お前か…」

「先生かと思つた？」

ぼそりと呟いた筈が、聞こえていた様で溜息を吐く。

「別に…」

あからさまに機嫌を悪くして言うてみる。

けど、奴は動じずに返してくる。

「何か初めて会話が成立したな」

ちらつと奴を見ると、何故か笑っている。

再び溜息を吐くと、周りに誰も居ないのを確認してから口を開く。

「何で俺に話し掛けてくるんだ？」

「さあ？何でだろな？」

折角俺から話を振ったのに、まともに返す気が無いのか？

「強いて言えば、放つとけないってかさあゝ…龍神って何か悲しい目してるからなあ…」

「……」

悲しい目…か…

「何でクラスの奴と喋らないんだ？」

「……」

「なあ？何でだよ？」

「…別にいいだろ。お前には関係ない事だし」

「ははッ…冷てえゝなあゝ」

「俺は他人と馴れ合うのは嫌なんだよ」

「ふうゝん…前の学校で何かあったんか？イジメとか」

「…別に…」

「じゃあ何でだよ？」

いい加減しつこく聞いてくるコイツに腹が立つ。

「五月蠅えゝんだよ！俺は一人が良いんだ！放っとけよ！」

突然俺が怒鳴ったモンだから、奴がビビッてるのが目に見える。

「…休み時間終るから戻るな…」

そう言つて奴は屋上を後にした。

一人になった屋上。奴が居なくなつて、静寂が訪れる。

「紅刃…俺って駄目だよなあ…」

何か寂しくなつて、ついばやいてしまう。

渋々重い腰を上げて、教室へ戻る。

怠い授業が始まる。

「ただいま…」

誰も居ない家へと入り、誰に言うでも無く呟く。

靴を脱いで階段を上がり、俺の部屋へと入ると制服のブレザーを脱いで、ベッドへと倒れ込む。

枕元に置いてある写真立てを手に取り、そこに飾られる写真を眺める。

中学に上がる直前、出来立ての制服に初めて袖を通して撮った、幼馴染みとの写真。

肩を組んで、満面の笑みで写る自分と紅刃。

あんな事さえ無かったら、今でもこの笑顔で居られたのかな…。

そっと目を瞑って大の字になる。

「おい！陣！早く行くぞッ！」

春休み、いつもの様に紅刃が部屋に押しかけてくる。

「おうッ！」

「今日は陣のボールな」

「了解」

そのまま走って階段を下りる。家が隣同士なので、休みの日はいつもこんな感じだった。

玄関に置いてあるサッカーボールを手にとると、紅刃が玄関から飛

び出る。

「陣！さっさと行くぞ！」

「おうッ！」

二人は近所の公園まで走り、広場でサッカーを始める。
楽しいひと時だった。

日も暮れる頃、二人は遊び疲れて歩いて帰っていた。
たわいも無い会話が弾み、笑いあっていた。

「おわッ！」

アスファルトの段差に躓き、陣はバランスを崩す。
何とか転ばずに体勢を立て直すも、ボールが手から離れ、転がって行く。

「ダサッ！」

「うるせッ！」

陣はボールを追い掛けていく。
こういう時、子供と言うのは目標物に集中してしまい、周りが見えなくなる。

例えば正面から車が向かって来ても。

「バカッ！」

その一言が陣の耳に入った瞬間、目の前に車があり、ドンツという衝撃と共に身体が吹っ飛ぶ。

暗い暗い闇の中、微かに声がする。

紅刃…？

つたく、気を付けろよな。俺が助けてやったから良いものの…

え？…紅刃が？なあ、何処にいるんだよ紅刃？真っ暗で何も見えな
いよ！

…悪い…陣とはもう遊べなくなっちまったんだ…

ツ！？何言って…紅刃

…悪い…でも、陣の心に俺は居るから…見守ってるから…俺の助けた命、無駄にすんなよ！

嫌だッ！いきなり何なんだよッ！俺らいつまでも一緒だろ！親友だ
ろ！

悪い…

何なんだよ！訳わかんねえよ！

……

目を開けると白い天井があった。

そして、母さんと父さんの泣き崩れた顔も。

「…刃…」

紅刃の事を聞こうとして喋ったつもりが、声が掠れてしまう。

でも、口の動きで分かったのか、母さんが俺を抱きしめ、声を上げて泣き出す。

「母さ…苦し…」

「ごめんね…ごめんね…」

何だか訳がわからずに母さんを抱き返す。

昔、俺が泣いてた時に母さんがしてくれた様に、背中を優しく撫でてあげる。

「陣…紅刃くんは、違う部屋に居て、今は会えないんだ…」

父さんが俺に目線を合わせずに言うてくる。

「本当に…？」

「陣が元気になったらお見舞い行こう」

嘘だ。

「紅刃が言ってた…俺が助けたって…もう一緒に遊べないって…」

夢だと思いたいのに、言葉にしたら勝手に涙が溢れて、零れていく。

「そつか…目撃した人が言ってたんだが…紅刃くんは車に轢かれそうになったお前を突き飛ばして…車に跳ねられたらしい…打ち所が悪くてそのまま…亡くなったそうだ」

現実を突き付けられた俺は退院しても部屋に籠り、誰とも会話をせず、食事も喉を通らない日が何日も続いた。

「陣…明日紅刃くんの葬儀があるそうよ…」

ドア越しに聞こえる母さんの声。

紅刃は死んでなんかない。何処かで生きている。そして、いつかひょっこり現れて脅かそうって寸法なんだ。

「陣…明日で紅刃くんとは二度と会えなくなるんだ…」

今度は父さんの声だ。

「嫌でも連れて行くからな…。お礼…言えよ…」

父さんの声が最後に震えた。

俺は一人、部屋の中で泣いた。声を押し殺して。神様が居るなら、何て残酷なんだろう…

次の日の夕方、精一杯抵抗する俺に礼服を着せ、葬儀場へと無理矢理連れて行かれる。

そこで現実を見せ付けられる。

棺桶の中、沢山の真っ白い花に囲まれて、穏やかに眠る紅刃が居る。その寝顔は満足そうで…

身体を揺すれば目を覚まし、また何時もの笑顔を向けてくれそうで…

そっと抱きしめて、何度も謝った。涙で顔をぐちゃぐちゃにして。

そして最後に

「ありがとう…」

目が覚めると涙が零れていた。

いつの間に眠っていたのだろうか。

まだはつきりと覚えている、あの寝顔。

初めて見た死に顔。

とても良い顔だった。

そして骨だけになった紅刃。

心にぼつかりと空いた大きな穴。

こんなに悲しいなら、親友なんていらない。

いつからかそう思う様になっていた。

そして、外に出れば紅刃との思い出の場所が余りにも多すぎて、部屋に籠る様になった。

学校にすら行かない俺を見兼ねてか、引っ越す事になった。何も知らない土地へと。

「なあ龍神。今日お前んちに遊び行っていないか？」

昼休み、屋上で一人空を眺めていると、またコイツが来た。

「友達でも無えゝから断る」

「俺は友達って思ってたけど？」

「はあ？」

「だって俺とは喋るじゃん？だから」

呆れて溜息を吐く。その時、風が優しく頬を撫でる。

何か、紅刃に友達になってやれよって言われた気がした。

「…ってか…名前知らねえゝし…」

「クラスメイトの名前位覚えとけよ…。滝上 竜一だ」

「竜一な…」

あれ？俺、何か変な事言ったか？竜一がきょとんとしてるぞ？

「…何だよ？」

「いや、何か家族以外から名前で呼ばれんの初めてだからさ」

「ふうん。変なの」

「変じゃねえゝだろ？んじゃあ龍神の事、陣って名前で呼ぶからな！」

何ムキになってんだ？ってか、久々に親以外から名前言われたな…

「別にいいぞ？慣れてるし」

何か俺も強がつてねえか？何か懐かしいかも…

「んじゃあ学校終わったら着いてくからな」

「ああ…」

俺の返事を聞くと、何か楽しそうな笑顔を俺に向けて教室に戻っていった。

「何かアイツ…紅刃に似てね？」

誰にともなく呟くと、再び風が優しく頬を撫でて行く。

まるで紅刃が、そうかもなって言ってる様に。

放課後、竜一がいきなり俺の肩に腕を回してくる。

「早く行こうぜえ」

やはり満面の笑みを俺に向けてくる。

「馴れ馴れしいんだよ！」

軽く腕を振り払う。何か周りの視線が集中してきてるんですが…

「早く行くぞ」

居心地が悪くなって、竜一にそう言つと、さっさと教室を出る。

「あッ！おいッ！待てっ
て！」

竜一も慌てて着いて来る。

現在、過去、今（後書き）

取り敢えず、思い着いたのを一気に書いてみました。読みずらかったら申し訳無いツス。何か今までちよろちよろ色んなのを書いてきた中で、一番ハッキリと終わりが頭の中に浮かんできました。なので、そこまでどう持つて行くか悩んでますが、生暖かい目で、生暖かく見守ってやってください。

今、これから

「へえ、此処が陣の家なんだ。以外と俺んちから近いんだな」

「近所かよ……」

「そこの路地入って2、3分歩いたところだよ」

「ふうん……」

別に興味が無かったので、俺は玄関の鍵を開けて中に入る。

「あッ待てよ！」

慌てて竜一も玄関に足を踏み入れる。

「お邪魔しまあゝす」

軽く会釈しながら入って来る。

そして俺の部屋へと通す。

「…何かござつぱりしてんな」

「悪いかな？」

「いや、何かさあゝ。俺の部屋が汚すぎなんかなあ？」

竜一が腰を下ろして、俺の部屋を見回している。

「何だ。お前友達居るんじゃない」

ベッドの枕元に置いてある写真立てを見付けたのか、そう言うてる。

「まあな…」

正確には『居た』だけだな。

「遊びに行ったりとかしてんのか？」

まあ事情を知らないからだろうけど、一番触れられたくない話題を振られて、つい思い出してしまう。
ふと涙が出そうになる。

「何か飲み物と菓子持って来る…」

「んッ？ああ、別に気い使わなくてもいいよ」

「遠慮すんな」

今にも零れそうな涙を見付からない様に、竜一の方に振り向かず、そのまま部屋を出る。

台所へ行き、涙をティッシュで拭う。

深呼吸をして、気を落ち着かせると、冷蔵庫を開けてオレンジジュースのボトルを取り出す。

お盆にコップ二つとボトルと適当な菓子を乗せて、部屋に戻る。

相変わらず落ち着かない様子できよろしている竜一に、コップを差し出しオレンジジュースを注ぐ。

「陣つて、サッカー好きなん？」

「ん？何で？」

菓子の袋を開きながら聞き返す。

「そこにボールがあるから、何となく」

コップに口を付けながら、ボールを指差す。

「昔な…」

「今はやんないんか？」

「まあ相手居ねえし…」

それに、サッカーなんかしたら、余計に思い出すし…

「俺が相手じゃ嫌か？」

「遠慮しとくよ。俺下手つぴだし」

嘘を付いた。本当は結構出来るんだけど、やりたく無かった。

「俺が教えてやるよ。だからやるーぜ？」

「サッカーはもう嫌いなんだ。だから、やんない」

「ちえッ！つまんねえ」の」

何か不貞腐れて、そっぽ向いてやんの。そんな所が紅刃と似てる…
駄目だ…思い出しちゃう…

「お、おい。何泣いてんだよ？そんなに俺とサッカーやるのが嫌だ
ったんか？」

やべ…勝手に…

「違う…勝手に…」

どんどん溢れてくる涙。止めたいのに止まらない。

「もしかして、この写真の奴…」

1番触れられたく無い事。

「黙れ…」

怒りを籠めて言う。こんな醜態を他人に曝してる自分が情けなくて。

「俺もな…」

竜一は、そんな俺に怯まず口を開く。

「俺も小学生ん時に、弟を亡くしてんだ…」

「え…？」

竜一のその言葉に、俺は固まる。

「小児癌ってやつさ…。酷えもんだった…。薬漬けで、日に日に弱ってって、痩せてって…」

竜一も…？しかも弟…。

淡々と話す竜一に、俺は言葉を失っていた。

目の前で日に日に弱っていく弟に何もしてやれないもどかしさ。それは、一瞬で失うより辛い筈。

なのに竜一はいつも笑顔でいる。

何でだよ…

「最後は…全ての苦しみから解放された穏やかな顔してた…」

竜一が微笑む。悲しい筈なのに…

「何で…」

「ん？」

「それで何で毎日笑ってられんだよ…」

「俺も最初はお前みたいな感じだったよ。けど、そんな俺を見たら、アイツは悲しむだろうし…それに、俺の心の中に生きてる。楽しかった事、悲しかった事…全部記憶として俺の中にある。だから俺は

アイツの分まで生きて、死んで向こうの世界に行ってアイツに会ったら、胸張って話せる様に精一杯生きてやるんだ」

「……」

凄い衝撃的だった。そんな考え、微塵も思い付かなかった。途端に今までの自分が恥ずかしくなる。

今の自分を紅刃に見られたら…いや、既に見られているかもと考えてしまう。折角紅刃が自分の命と引き換えに守ってくれた命なのに、今の俺は死んでも同然だ。

紅刃が見たら、助けるんじゃないかと後悔させちまうかも…。

「…俺って馬鹿な奴だ…折角紅刃が守ってくれたのに…無駄にしようとしてた…」

いつまでもこんなじゃ絶対後悔させちまう…。いや、もう後悔させてるかも…。

「それに気付けたなら、もう大丈夫だな」

それから

竜一に全てをぶちまけた俺は、紅刃に見られても恥ずかしく無い様に生きる事を決めた。

折角守ってくれた命。紅刃が羨ましがる位、精一杯生きてやるんだ。

「竜一。今度一緒に俺が生まれた街に行かね？」

「いいぜ」

他人を、友達を自分から誘うなんて何年振りだろ。

「んでさ、サッカーするんに凄え良いトコがあるんさ」

「いいぜ。やるからには負けねえぞ？」

サッカーも久々にやりたいと思った。ってか無性にやりたい。

「俺、強えぜ？」

「何言ってるんだよ。さっきは弱いだの何だの言ってたくせに」

blankがどうって不安は無く、竜一には勝てる気がした。とは言え、紅刃の時はそれで負けてたけど。

「五月蠅え！もう今までの俺と思うなよ？」

「望むところだ！」

何かこんなやり取りも懐かしい。
でも、新鮮に感じて清々しかった。

「ありがとう…」

俺はボソツと呟いた。竜一に聞こえて欲しいけど、照れ臭くて聞こえて欲しくないと思いながら。

「……」

竜一は何も言わず笑みを向けてくる。
聞こえたんだろうなと思い、照れる。
けど、何だか安心した。

グウウ…

「…腹減ってんの？」

「…何かスッキリしたから…かな？」

最近飯なんて口クに食ってなかったしな。

「んじゃあ菓子食うべえや。俺も腹減った」

「そうだな」

その日以来、俺は竜一の助けを借りながら、学校でも他の奴と喋る様になった。

初めは皆驚いていたけど、意外とすんなり俺を受け入れてくれた。そして自然と増えていく友達。懐かしく、そして暖かい。

なあ紅刃…俺、一生懸命生きるから見ててくれ。必ず後悔はさせないから…そして、俺が死んだらちゃんと迎えに来いよな…

終わり

それから（後書き）

終わりです。最初考えていた終わりとは違う終わり方になってしまいました。これはこれでありだと思い、こういった終わり方にしてみました。文章力に乏しく、纏まりの無い様な物になってしまいました。此処まで読んで頂き、有難うございました。またネタが浮かびましたら書くかもしれないですが、その時はまた読んでやって下さい。読んで頂き、誠に有難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3479f/>

君がくれた命

2011年1月18日15時44分発行